

第 1963 回定例研究会報告要旨（9月7日）

科学技術のリスク認知と その社会的受容に影響を及ぼす心理的要因

（大阪学院大学情報学部）田中 豊

リスク認知は、「人間に特有なリスク推定の認知プロセス」と定義され、近年、リスク認知の様々な特徴やバイアスが報告されている。確率のとらえ方には客観的確率と主観的確率とがあり、我々の決定行動は、客観的確率ではなく主観的確率に基づいている。

専門家と一般の人々とは、それぞれ異なる次元でリスクの程度を判断し、その結果として異なるリスク認知を持っている。専門家の判断は科学的・客観的な指標をもとに行われるのに対して、一般の人々の判断は特定の出来事の目新しさや鮮明さ、事故が生じた場合のカタストロフィーの程度、制御性、未来の子孫への脅威などにより強く結びついており、より直感的な判断に頼っている。しかし専門家の判断が、常に専門家同士で一致し、妥当であり、誤りがないというわけではない。双方が自分の判断基準こそ正しいと主張し、相手を理解できないと感じ、相手を見下げるような態度を取れば、両者の間に噛み合った建設的な議論はできず、相互の不信はますます大きくなる。

様々な科学技術およびその産物、あるいはリスクを伴う活動などに対するリスク認知の構造を、因子分析を用いて分析した結果、「恐ろしさ因子」と、「未知性因子」の2因子が見出されている。そしてこのリスクの2因子構造は、米国や日本、ヨーロッパなど様々な国の人々を対象とした場合にも、同様に確認されている。

種々の科学技術およびその産物の社会的受容においては、リスク認知、ベネフィット認知、信頼などの心理的要因が重要である。信頼の要因に関して、この20～30年の間に、情報源としての政府が、人々の間で著しく信頼を失っている。また政府や事業者に対する信頼は、容易に低下し得るが、一方で、信頼

を増すのは難しい。

原子力施設の社会的受容に関して、一般論の状況と、立地の状況とでは、社会的受容におけるリスク認知およびベネフィット認知の重要性は異なる。

近年実施された世論調査の結果より、一般の人々が食品の購入や安全性を考える上で、遺伝子組換え食品を使用しているかどうかは、最も重視する項目ではないが、重視する項目の一つであると言える。

バイオテクノロジーに対する認知地図の研究より、バイオテクノロジーの種類や適用対象により、そのリスクやベネフィットが大きく異なって認知されることが明らかにされている。そしてたとえば同じクローン作成や遺伝子組換えであっても、適応対象が植物、動物、人間の順で、より危険であり、またより利益が小さいと認知されている。

遺伝子組換え技術の社会的受容は、遺伝子組換え技術が植物、動物、人間、のいずれに適用される場合であっても、リスク認知、ベネフィット認知、企業や研究者に対する信頼、生命倫理観、の四つの心理的要因から主として説明される。またこれら四つの要因のうち、どれが最も重要な要因であるかは、遺伝子組換え技術を適用する対象により異なる。

国家が先進国へと発展し、科学技術が進歩し、生活が安全かつ豊かになるにつれ、比較的軽微なリスクを過大視するようになり、あたかも重大なリスクであるかのように考えるという、パラドックス的な状況も見受けられる。

政府や専門家と、国民との間の乖離が大きくなれば、結局は両者にとって不本意な結果を招く。一般国民のリスク認知など、人々の心理的な側面を踏まえた政策でなければ、先進国であり民主主義国家である我が国では、十分な効果を上げることは難しい。

バイオテクノロジー、遺伝子組換え農作物、遺伝子組換え食品などのリスク認知や社会的受容に関する心理学的・実証的な研究は少なく、今後、早急に積み重ねる必要がある。